講評：萩野聡子「記憶を受け継ぐ―アニカ・トールの語りとその翻訳の受容について」

中丸　禎子

１．序

本講評は、萩野聡子氏が東京大学に提出した卒業論文「記憶を受け継ぐ--アニカ・トールの語りとその翻訳の受容について」を対象とする。同論文は、スウェーデンの現代作家アニカ・トール（Annika Thor, 1950～）の四部作「ステフィとネッリの物語」をスウェーデン語原文で読み、主に「翻訳」と「少女小説」という観点から論じたものである。

２．評者の立場

わたしは、北欧文学とドイツ文学を研究している。H. C. アンデルセン『人魚姫』（1805～1875、デンマーク）を中心とした人魚文学、民話『巨人フィンの物語』など民話・伝承とその受容の研究と並び、セルマ・ラーゲルレーヴ（1858～1940）、トーベ・ヤンソン（1914～2001／スウェーデン語を母語とするフィンランド人）、アストリッド・リンドグレーン（1907～2002）など、19 世紀後半から 20 世紀初頭に生まれたスウェーデン語作家を主な研究対象とする。

萩野氏との関わりは、わたしが 2022 年度前期に東京大学の講義科目「スウェーデンの言語と文化」を非常勤講師として担当したことに始まる。この講義は、スウェーデン語の文法解説と北欧文化についての講義から成るもので、講義期間終了後に、受講者有志がスウェーデン語読書会を設立した。萩野氏は当該講義の単位習得者であり、読書会の主要メンバーである。

３．論文「記憶を受け継ぐ―アニカ・トールの語りとその翻訳の受容について」概要

萩野氏は、かねてよりユダヤ・ヘブライ文化に興味を持ち、卒業論文の対象に、ユダヤ系スウェーデン人作家アニカ・トールを選んだ。四部作「ステフィとネッリの物語」は、「キンダー・トランスポート」（ナチの迫害を逃れるため、ナチ政権下の国に居住する 17 歳以下の子どもを外国に逃す事業）により、オーストリア・ウィーンからスウェーデン・イェーテボリ近郊の島に移住したユダヤ人姉妹の姉ステファニー（ステフィ）・シュタイナーを中心に展開される。作者トールは、主人公姉妹が架空の人物であること、自身の母のいとこがこの事業で 1938 年にドイツからスウェーデンに移住したこと、自身の母もまた、いとこに先立つ 1933 年に家族でスウェーデンに亡命したことを明らかにしている。なお、トールは菱木晃子氏による翻訳刊行を記念して来日し、各所で講演会を開催した。評者は講演会「「アニカ・トール　自作を語る―異国へ逃れた子どもたちの孤独（Annika Thor berättar om sina böcker om barn på flykt.――Ensamma i främmande land)」（2010 年 4 月 14 日、於：スウェーデン大使館）を聴講した。当時のメモによれば、トールは、この講演でスウェーデンは他国に対し自国の人道性を示すために最低限の人数（500 名）の子どもを受け入れたこと、ドイツ語圏の都市からスウェーデンの農村に移住した子どもたちが、約束に反して教育の機会を奪われ、労働力として搾取された例も多かったことを、やや批判的に語った。

萩野氏は 2023 年夏にスウェーデンに滞在し、作者へのインタビューを含む現地取材と資料収集を行った。原文のテクスト分析とこれらの収集資料を用い、以下のような構成で卒業論文を執筆した。

- 第一章　「語り」の分析　作品の特徴として戦争に対する間接性と細部描写について論じる。

- 第二章　少女小説としての分析　シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』(1847)、ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』(1908)、ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』(1912) と同作を比較し、古典少女小説における恋愛の成就に対する、「ステフィとネッリの物語」シリーズにおける恋愛の破綻・性（暴力）描写を指摘する。さらに萩野氏は、『赤毛のアン』が三人称過去、続編『アンの幸福』および『あしながおじさん』が書簡体の採用により一人称の現在形と過去形が織り交ぜられているのに対し、「ステフィとネッリの物語」シリーズが三人称現在形で書かれていること、作者自身がそのことを現代性を持たせるためと説明していること、作品もそのように評価されていることを指摘する。加えて、妹ネッリの語りが第 4 巻で初めて登場することについて、ネッリが第 1 巻のステフィと同じ年齢となり、語ることが可能になったことを指摘するとともに、そのことによって物語がわかりやすくなるのではなく、複雑な心境を示しえることを指摘する。この指摘は、「おわりに」と接続する重要な指摘である。
- 第三章 スウェーデン語原文、日本語訳、英語訳比較　日本語訳は、日本語として読みやすい文体で書かれ、従来の少女小説・児童文学として提示されること、スウェーデン語特有の表現が使用される個所において、日本語訳は視覚、英語は触覚を追加するなど各言語の比較、英語訳の検討を行う。
- おわりに　章番号のない第 4 巻最終章について、この時点のネッリが、冒頭のステフィと同じ年齢になったことを指摘する。萩野氏は、ネッリにとって、この章が、姉ステフィがイェーテボリで経験した 12 歳からの 6 年間を、新天地アメリカで経験することの始まりであると分析する。その上で、「少女の成長」というテーマが、ステフィの生きた時代の特殊性とともに現代の読者に通じる普遍性を備えていること、その普遍性が若い世代に伝えられていくこと、トールの母のいとこの体験が、トール地震やその娘の体験と重ねて記述されたことから、「少女の体験は上の世代から下の世代への連鎖にとどまらず、遡って循環している」ことを指摘する。

４．論文「記憶を受け継ぐ―アニカ・トールの語りとその翻訳の受容について」の評価

（１）スウェーデン現代文学研究としての成果

何よりも高く評価できるのは、萩野氏がスウェーデン語学習開始からわずか二年足らずで、スウェーデン語で書かれた原著並びに現地収集資料を用いて卒業論文を書き上げたことである。大学の授業では、初めて学ぶ言語は、週に 1 度・1 年間で文法を習得するケースが多い。半期の授業、かつ、文化講義パートも組み合わせた「スウェーデンの言語と文化」において、3 年次に始めた言語を用いて卒業論文が執筆できたことは、ひとえに萩野氏の努力と才覚によるものである。また、スウェーデンへの渡航と情報収集、そして、作者への対面インタビューの実施からは、萩野氏の高い意欲がうかがえる。

もちろん、スウェーデン語経験の短さ、日本国内でスウェーデン語資料が入手困難である中、限られた時間で現地収集した資料の偏りや量的不足、何より、スウェーデン現代文学の指導者の不在など、萩野氏のおかれた環境・状況に由来する限界はある。しかし、萩野氏は、得意の英語を活かした翻訳比較や作者インタビュー、（他分野と比べ数は少ないものの、北欧文学研究よりは）豊富な先行研究を持つ英語少女小説との比較など、現状において可能な研究手法を取り入れることで、環境・状況を補っている。この研究姿勢は、日本において現実的に北欧文学研究を続けるために必須であるとともに、いまだメジャー言語の中だけで完結しがちな翻訳・受容・世界文学研究、少女小説研究に、北欧文学研究の立場から貢献する可能性を有している。

（２）今後に向けた提言

上述の通り、当該論文は、卒業論文として十二分以上の高い成果を示すものである。一方、卒業論文の不備としてではなく、今後の発展可能性として指摘するならば、第一章・第二章・第三章のテクスト分析をさらに深めたうえで、各章を有機的につなげることが課題として挙げられる。「おわりに」における、物語の姉から妹へ、登場人物から読者へ、作者の親世代から作者と娘への継承というテーマの指摘、さらには、その継承が過去から未来へという時系列順に限らず、未来から過去にさかのぼり循環するという指摘は、萩野氏のオリジナリティを強く表すとともに、各章の分析がよく踏まえられている。このような形で各議論を深化し、議論を作品外に向かって開いていくことが論文全体で可能となれば、萩野氏の研究、スウェーデン現代文学研究、そして、文学研究それ自体が、より高い水準に到達すると期待される。

上記を実現する方法は多数あり得るが、わたしからは以下の３点を提案する。

１点目は、少女小説論の比較対象を英語圏以外に広げることである。特に、戦後スウェーデンを代表するリンドグレーン『長くつ下のピッピ』は、名前の由来が『あしながおじさん』であることを作者自身が明言しており、容姿の由来が『赤毛のアン』であることを複数の先行研究が指摘している。また同作は、古典少女小説のカウンターとして書かれていることから、比較の必要性、比較した際の議論の発展性は高いと期待できる。これに際し、トールの「アストリッド・リンドグレーン賞」受賞演説はぜひ参照したいところである。

２点目は、少女小説論の比較対象を、「きょうだいの物語」に広げることである。卒業論文で比較された『ジェイン・エア』、『赤毛のアン』、『あしながおじさん』の主人公にはきょうだいがいない。これらと比較した際の「ステフィとネッリの物語」シリーズの特徴は、姉妹の物語たることであり、妹ネッリの意義について萩野氏が優れた分析をしたことは先に述べたとおりである。この議論を発展させるには、「きょうだいの物語」との比較が有効である。ステフィとネッリには、同じような出生状況でありながら異なる環境（スウェーデンに移住した年齢、引き取られた家庭）が運命を分けた側面と、同じような環境で育ちながら異なる性格を持つ側面がある。前者としては、アゴタ・クリストフ『悪童日記』、エーリヒ・ケストナー『ふたりのロッテ』、血のつながったきょうだいではないが同趣旨の作品として、マーク・トゥウェイン『王子と乞食』、ハンス・ペーター・リヒター『あのころはフリードリヒがいた』などが挙げられる。後者としては、ルイザ・メイ・オールコット『若草物語』、アストリッド・リンドグレーン『はるかな国の兄弟』などが挙げられる。これらにおいては、年上と年下の立場の逆転、つまり、年上の者が年下の者を庇護し、導く関係が、年下の者が年上の者を支えたり、その性質を継承したりする。ロイス・キース『クララは歩かなくてはいけないの？少女小説にみる死と障害と病』（藤田真利子訳、明石書店）では、『若草物語』のベスからジョーへの家庭的性格の継承が、『ジェイン・エア』のヘレン・バーンズからジェインへのおとなしさの継承に重ねて論じられている。こうした継承の在り方と、萩野氏の指摘する循環を比較した際、古典少女小説のカウンターとしての恋愛描写をどのように評価できるのか、萩野氏の分析を読んでみたい。

３点目は、翻訳論を展開させるにあたっての映像化作品との比較である。「ステフィとネッリの物語」シリーズは、第１作刊行から５年後の 2003 年にドラマ化され、小説版の表紙にもドラマの一場面が使われた版がある。映像化作品においては、主人公に寄り添いながらも三人称の語り手や、現在形で書かれた時制は目に見える形では表れない一方、小説を読むよりもドラマを見る方が、「なめらかさ」は高い。現在の翻訳論において論じられることの多い「アダプテーション」は、小説の映像化論からスタートし、翻

訳も一種のアダプテーションと捉えることで翻訳論の俎上に上った。萩野氏が末尾で指摘する、翻訳の「「なめらかさ」を優先事項とする方針」をとらえ直す際に、映像化との比較がなされれば、当議論は翻訳論としても大きな発展を遂げると期待される。

萩野氏の今後の研究の発展と、北欧文学研究者同士としての情報交換・共同研究の継続を強く願い、講評を終える。